

**写真に収めた人物と
セックスが出来る魔法のカメラ
だけど使用可能回数は一度きり**

「とんだ欠陥品だっ！」

舌打ちしながらそうつぶやいて、俺は手に持っていたデジタルカメラを川に投げ捨てた。

正直かなり腹が立っていた。

まだ購入して1年と少し、それに使用頻度もさして多くないのにもう壊れてしまったのだ。

修理に出してもどうせ高くつく。

それほど高価なものではなかったので、まさにことわざで言うところの

“安物買いの銭失い”

という感じで、あきらめて怒りに任せて投げ捨てたのだ。

時刻は午後6時過ぎ。夏の川辺はまだ十分に明るい。

そのままブツブツ言いながら川沿いを歩いていた俺に、

ガンッ！！

何かが肩に当たった。

結構な衝撃だった。俺は瞬時に、何かの物体が飛んできて自分に当たったのだと判断した。下を見ると、一辺15センチくらいの立方体のダンボール箱が落ちていた。

「何だ！？」

中を開けると、カメラ一台と紙切れ一枚が入っていた。

箱は濡れており、ダンボール箱はシナッとなっていた。

俺は、

“まさか！！??”

と思った。

数十秒前に投げ捨てた壊れたカメラの代わりに、“コレ”が川から飛び出してきた??

そんなバカな！！

だけど周囲にはおらず、先ほどカメラを投げ捨てた場所から10メートルと離れていない。

飛び出してきた瞬間こそ見ていないが、俺は奇妙な心持ちになった。

そして一瞬だけ、金の斧・銀の斧の童話を思い出した。

もちろん、状況的にも投げ捨てたモノにしてもその童話とは全然違うわけだが。投げ捨てたものと同じ種類の別のものが返ってきたという一点のみ一致している。

俺はカメラを手に取る前に、そのカメラの説明書と思われる紙の内容を確認した。

一般的なカメラの複雑で細かな説明書とは違って、少ない字で簡潔に書かれているだけのようだった。

内容はすぐに全部読めたが・・・読み終えた俺はそこに書かれているあまりに突飛な内容に、驚きを隠せなかった。

説明書きによると、そのカメラは一度しか使えないポンコツのカメラらしいのだが、その代わり一つだけとんでもない力を秘めているとのことだった。

その“力”とは・・・。

“写真に収めた女性とセックスが出来る”

俺は信じやすい馬鹿正直な男だ。

だから、その説明書きを見て

“本当かよ？うさんくせーな！”

が3割。

そして、

“スゲーー！！！”

が7割。

それが俺の第一印象だった。

俺はセックスなんて長らくご無沙汰。

さしてモテない一人身の寂しく馬鹿な男だ。そんな男が怪しいカメラを拾って一人で喜んでいるなんて、まあ普通に考えればとても寂しい事実だが・・・こんなことなんてそうあることではないのだし、ということで、俺は騙されたと思って一度試してみようと決断したのだ。

本当かどうかを確かめるためには、実際やってみる以外に方法はない。

繰り返しになるが、100%信じているわけではなかった。だけど実際にやってみる以上、一度きりと書いてあるので相手は慎重に選ぶ必要がある。

何せ説明書きには“女性なら誰でも”という文言がある。とっておきの美女、自分のタイプを選ばない理由はない。

考えてみれば芸能人だってイケるわけだ。大好きな女性歌手でもグラビアアイドルでも、その気になれば誰でも。

しかし、俺は冷静な部分もしっかり残っていた。多大な労力を使って写真を一枚撮ったところで、それが嘘だったら元も子もない。胡散臭さが抜けない力

メウにそこまでは労力を使いたくはなかったのだ。それに、例え一度きりとは言え、赤の他人を許可なく撮影するという行為はそれなりの覚悟が必要だ。芸能人を隠し撮りともなれば、下手すれば犯罪者になりかねない。

そういった色んな点も考慮しながら、俺は相手を誰にするか思考を巡らせた。

——誰にしよう???——

——街を歩いて見つけた美女にしても良いかもな——

——でも・・・いや、まてよ・・・??——

結果、俺は過去に会ったことのある人に決めた。

それは過去に足の怪我をして通っていた病院に勤めている美人ナースさんだ。

名前は高宮（たかみや）さんと言う。下の名前は知らない。

年齢は聞くことなんてしていないのであくまで見た目の話になるが、現在27歳の俺よりほんの少し上くらいに見える。

こんなことを言うと同業者の方に悪いかもしれないが、看護師なんかしているのはもったいないくらいの美人。それにめちゃくちゃ色気がある。例えばモデルなり、あるいはホステスなり、女としての自分を売る仕事をすれば一躍トップになれるくらいの美人なのだ。しかも、一度接しただけで人当たりの柔らかい優しい性格の人だということも分かった。

知り合いという程ではない。俺自身その病院には何度も通っていて軽く話をしたりもしたのもしかしたら顔くらいは覚えてもらっているかもしれないが、まあ“こちらが一方的に知っているだけ”と言った方が近いかもしれない。

決めてから行動に移すのはとても早かった。もっとも、やはりまだ階疑心は拭えていなかった俺。ただの子供騙しのイタズラかもしれないこのことに時間を置くつもりはなかったのだ。

適当な仮病を作って、高宮さんが勤務している病院に行った俺。

仮病で学校や仕事を休んだことは過去に経験があるが、仮病で病院へ行くなど初めて。世間一般で見ても至極珍しいことだと思う。

運良くその日は彼女の姿があった。以前と同じように元気よく笑顔でいつものように働いていた。怪我をしたのが約半年前なので、最後に彼女を見てからまだ期間は立っておらず、雰囲気も容姿もなんら変わっていなかった。

いつ見てもテキパキと仕事をしている彼女。その元気でハキハキとした雰囲気も非常に好感を持てるが、一方で高宮さんのような可愛い女性がナース服を着るとナース服が異様なほどエロく見える。白衣を着た女性がエロく見えるの

は昔から変わることのない男たちが持つ独特の事実だと思うが、やはりこれは着る人が綺麗でないと成立しない。

首元から胸部の終わりまでにかけて大きな山が出来ており、ナース服にはシワがいつているほどだ。その盛り上がりを見ても、おっぱいの大きさもかなりのもの。それは以前から分かっていたことだ。

顔は、唇がプリンと少し分厚くて、目がくりっと大きい。笑うと目じりが下がり、とても愛嬌のある笑顔になる。

顔も体も完璧。

露骨な表現になるが、俺の体はそんな彼女と相当セックスがしたいらしい。何故なら、見ているだけで股間が膨らみそうになるからだ。

しかし、おそらくこちらが一方的に覚えているだけで、目があって挨拶をするような間柄ではないことは分かっていた。だから俺はしばらく不審者にならない程度に彼女をこっそり目で追って、機会を窺っていた。

“機会”

この時に限っては、声をかける機会ではない。

カメラで写真を撮る機会のことだ。

しかし、病院で見つからないように写真を撮るのは難しい。見つかったら例外なく不審に思われるだろう。病院で写真を撮るなどあまり常識的ではないし、それに俺は一人だ。

タイミングが分からず少しイライラしていた。ひと思いに“カシャッ！”といきたいものだが、やはりためらってしまう。

いかがわしいカメラ片手に、風変りな写真撮影をしようとしている自分が客観的に見えてしまい、

“自分は何をやっているのだろう”

などとも思いはしたが……………。

ついに俺は“よしっ！！”と勇気を出し、覚悟を決めた。

高宮さんが人のいない病院の廊下を移動している時を見計らい……………。

カシャ！！

音がする、しないは説明書に書かれていなかった。このカメラの性質上、ほとんどの場合は“隠し撮り”になるわけだから、音の有無は大切な要素なはず。書いておくのが筋だろうなどとも思ったが……………。結果、小さな音がしたが彼

女に気付かれることはなかったので安心した。

しかし、驚いたのはここからだ。

廊下の端にいた高宮さんとは距離にして20メートル。小さなシャッター音など聞こえるはずがない。その上写真を撮ったのは彼女の後ろ姿。それなのに、彼女は急にこっちを振り向いて睨んだのだ。

これには驚いた。

“ドキッ！！”

俺の心拍数が急激に高くなる。

周りで見えていた人間はいなかったはずだ。それに彼女自身、写真を撮って5秒間くらいはこちらを振り向くこともなく、そのまま廊下の奥に向かって歩いていたのだ。

それが、急に何かを思い付いたかのように先ほどの穏やかな顔とは表情を一転させて、怖い面持ちでこちらに向かって歩いてくる。

俺は慌てふためいていた。

そしてついに彼女は俺の眼前までやってきた。

「あなた！今何したか分かってるの??」

「えっ!!??い、いや……」

どうしていいかわからないまま、俺は焦ってまごついていた。

「そういうのを、“ト・ウ・サ・ツ”って言うのよ！」

「あっ……あ、はい……そ、その……でも……」

「どうして気付いたのって顔してるわね！分かるのよ、気配っていうか……とにかく分かるの！」

あまりまともな答えになっていないが……。とにかく俺が勝手に写真を撮ったことは厳然たる事実。気付かれたことには謝らないと、ということで俺は平謝りした。

「……って訳なんです！ほんと、スミマセン！」

魔法のカメラ、なんて言っても馬鹿扱いされるか場合によっては頭のおかしい人になりかねない。適当な嘘をつくってごまかし、ひたすら謝った俺。

「ほんとにっ！しょうがないから今回は許してあげるけど、ほんとにこんなことじゃ済まないのよ？」

「はい！申し訳ないです！」

「ところであなた、私さっきから分かってたけど、以前話したことのある患

者さんよね？顔、覚えてるから・・・」

「ほんとですか？は、はいっ、以前怪我して長い間通ってたので・・・」

「でしょ？ああ、確か足の・・・」

「はい、足首の靭帯をやっちゃって」

「ああ、そうそう、そうだったわね。確か名前は・・・」

「中西です」

「そう、中西さんっ、今はっきり思い出したわ」

少し高宮さんの口調がいつもの柔らかい雰囲気に戻ったので安心。さっきは人が変わったように怒っていたので、彼女の知らなかった強気で厳しい一面を見てしまった。もっとも、自分のしたことを考えればあれくらい怒られるのは至極当たり前とも言えるのだが。

「でも中西さん、院内で堂々と盗撮なんかして、変な意味で度胸がある方なんですネ。もしかして・・・ナース服とかに興味があったりするんですか？」

「いや、その・・・ナース服っていうより、高宮さんの・・・」

俺は言いかけて途中でグッと言葉を飲み込んだ。

やめておこう、これ以上問題を大きくしたくないという考えが過ったのだ。

「私！？」

「い、いや何でもないです」

昔から女性にはあまりモテなかった俺だからだろうか、言葉が喉の奥でつかえて止まった。

“ナース服と言うより、あなたが大好きなんです”

その本心は結局俺の口から出ることはなかった・・・。

しかし・・・。

ここで奇跡は起こった・・・。

「中西さん、あなた凄く分かりやすいですよねぇ、顔で分かりますよ。私に・・・興味あるんでしょう？」

「えっ！？」

「返事はいいません、顔に書いてありますもん！フッフッ」

「えっ、いや・・・そ、その・・・」

「照れちゃって可愛い！」

確かにそれは、彼女の言う通りなのだが・・・。

事の運びが・・・なんだか普通じゃないぞ？

高宮さんは穏やかでそれでいて嬉しそうな顔で俺を真っ直ぐ見ている。

先ほど人が変わったように怒っていたのは何だったのか??

少なくとも俺が見る限りでは、彼女が俺に注いでくれているその視線からは明らかに好意が感じられた。

一歩間違えれば犯罪の、盗撮をしてしまった俺なんかはどうしてこんな好意的な……。

!!!!!!

そしてここにきて俺はやっと思い出した。

というか……それが本来のこの日の来院の目的。

焦りすぎて当初の目的を忘れてしまっていたが……“カメラ”だ!!

あのカメラは普通のカメラではないのだ、あのカメラを使って得られる効能……!!!!!!

そういうことか!!!

そしてあのカメラが偽物か本物か……その決定的な答えは、高宮さんの口から出てきた。

「分かりましたよ。そんなに私が好きなら……。会ってあげます!」

「えっ!!?」

「じゃあ私今日仕事が終わるのが夜診の終わる9時なので、9時半にこの病院の西側の下り坂の下にあるホテルの前で待っててくれますか?」

この瞬間、突如として自分の前に現れた怪しいこのカメラが、本当に魔法の力を持っていたということが確定された。でなきゃ、モテない俺にこんな都合のいい夢のようなことが起こるはずがない。

俺は彼女に気付かれないようにこっそり右手で腰肉をつねってみた。

確かに痛い。

夢ではなかった。夢みたいだった。

俺はなんとか平静を装いながら高宮さんと待ち合わせの約束を交わす。内心は高揚し、踊り出したいほどに歓喜していた。

約束の際についでに聞いておいたが、高宮さんの下の名前は“ユリエ”さんと言う。

「ごめんっ!待たせちゃいましたね……」

「いや、全然平気です!」

待ち合わせの時間に5分ばかり遅れてきたユリエさんだが、全く問題ない。

俺が感じるのはこんな美女とホテルの前で待ち合わせしているという喜びと、これから起こることへの尋常ではない期待だけだった。

「あっそう！あと、さっき撮った写真は、何枚撮ったか分からないけど、削除しておいてくださいね。さすがにまだ許可なく後ろ姿撮られていい気はしてないですからっ」

「あっ、はい」

正直、もう写真に用はない。というかカメラ自体に用はない。あのカメラはもう十分役割を果たしてくれたのだ。俺に次に必要なのは・・・ユリエさんのカラダだけだった。

彼女が気にするならもうカメラごと目の前で捨てても構わないとばかりに、先程バッグに入れておいたカメラを取り出そうとした。

「んっ？あれ・・・??」

バッグの中にない・・・。

「どうしたの？カメラなくなっちゃいました？」

「んん・・・あれ？はい、ないみたいです。さっき確かに入れたはずなのに・・・」

カメラはさっき確かにバッグの中に入れて、ファスナーを閉めたのを明確に覚えている。

「フフ・・・もしかしたら悪いことした罰が当たって消えちゃったんじゃないですか？」

ユリエさんのその言葉はまんざら間違いではない、というかむしろ事実に近いかった。

消えてなくなったとしか考えられないのだ。

一度限りしか使えないと書かれていた。

あのカメラは役目を果たしたということで消えたのだろうか？

なくなってしまっっては、その真相を確かめる術は皆無。だけど俺はなくなったそのカメラに感謝してもしきれない心持だった。

彼はナースのお姉さんと一夜を共にする、とんでもないプレゼントを与えてくれたのだ。

「・・・まあいいわ、ないならもういいですよ。別に今更そんなには気にしてないですから」

「ほんとですか、嬉しいです！」

「それより・・・これからどうします？」

「そ、そうですね・・・どうしましょうか？」

「中西さん、あなたってもしかしたら奥手な方ですか？硬派だとモテないですよ、もっと積極的にならなきゃ！」

「は、はい・・・」

「んもうっ！正直に“ホテル行こう”って言えばいいのよ！」

急に強気な友達口調に変わるユリエさん。

表情はとても朗らかな笑顔だった。

俺たちはそのままそのホテルへ直行。

目的はもちろん。

“セックス”

不思議なカメラにかけられた“写真に収めた女性とセックスが出来る”という魔法は、その説明書き通り確かな現実として俺の元に舞い降りてきたのだった。

馬鹿みたいに純粋な好奇心が、階疑心を上回って手に入れた魔法の現実。

奥手な俺の唯一の武器は“馬鹿みたいに信じる気持ち”だったというわけか。

これまで女性にあまり縁のなかった俺だけど・・・この日は・・・この夜くらいは・・・。

かかった魔法に全てを委ねたい。

その一心で俺は夢中でユリエさんを求めたのだ。

俺たちが待ち合わせ場所に指定し、そしてそのまま直行したのは彼女が働いている病院から一番近いホテル。

ラブホテルではない。

それほど高級なところではないが、ビジネスホテルというほど安っぽくはない。

そして、驚くことにお金はユリエさんが払ってくれた。

自分が払うと言った俺に彼女が言ってくれた言葉は・・・。

「私ね・・・すっごくムラムラしてて、体火照ってたの・・・そんな時に私を“盗撮”だなんて。さっきは良い気はしてないって言ったけど、正直言えば嘘ね。ずっと可愛って思ってた患者さんに・・・本心を言えば嬉しいくらいなの」

本当に全てが未体験。

こんなに良いことがあるなんて・・・俺はまだ魔法にかかっているのか？
カメラもなくなった今、それを知る術はどこにもないけれど。
そして。
ホテルに入ると早速俺たちは・・・。

セックス！セックス！！セックス、セックス、セックス、セックス・・・セ
ックス！！

・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

もう部屋に入って大分時間が経過した頃か・・・。

「ソフゥ、ムパチュプ、アェアレロレロッ、レロレロチュパチュプ・・・」
もはや・・・壮絶な領域に突入しているのだった・・・。

十数分前・・・

部屋に入って荷物を置いて、そして二人一緒にシャワーを浴びて。

流れるようなその一連の共同作業。

たぶん俺が急かしていたのだと思う。はっきり言って一秒でも早くセックス
がしたかった、ユリエさんと重なり合いたかったのだ。

久しく味わっていなかった女。

だから、パンツを脱いだその瞬間から直立膨張状態で顔を出した俺の息子はシ
ャワーの間も勃起しっぱなし。

まるで早く舐めてくれ、早く膣内（なか）に入れさせてくれと叫んでいるかの
ように、ビクンビクンと斜め上にそそり立って跳ね回っていた。

そして俺の一秒も待てんばかりのセックスへの願望は、ベッドの上でまるで堰
を切ったように解放された。

－体験版はここまでです－